

私心の小人、無私の大人

上 廣 榮 治

春の大会は種まき、秋の大会は収穫。私たちはどこかにそんな思いを抱きつつ、日々の実践に邁進しております。皆様のこの二十一世紀最初の年の秋に刈り取られた稔りはいかがでありましたでしょうか。さぞかし大きな実をあげ、一回りも二回りも人間を大きくされたのではないかと期待しております。

そんなことを思いながら、「大きな人間」とは、どんな人を指すのか、考えてみました。

中国語にも「大人」という言葉があり、中国語の辞典には「大人為大事」などの例文が出ていますから、何事か大きなこと、大切なことを「成し遂げるであろう」と思われる人のことでしょうか。

また、英語の大人は「グレート・マン」ですが、これは具体的に有能な人、すでに成果を上げている人を指し、中国語の「大人」が何となく大きなことをしそうな人物を指すのとは少しニュアンスに違いがあります。では、日本の「大人物」はどうかというと、これはさらに漠然としてきます。

大正時代に、ある外務大臣の私的な宴席で明治の人物論が出たという挿話を、司馬遼太郎さんが小説『坂の上の雲』のなかで書いています。「人間が大きいという点では大山巖だろう」とある人が言うのと、

